

SPOD (四国地区大学教職員能力開発ネットワーク)  
フォーラム2014の報告

—講師の立場からの報告—

三島 弘幸, 濱田 美晴, 高畑 貴志, 立川 明

## 報 告

# SPOD (四国地区大学教職員能力開発ネットワーク) フォーラム2014の報告

## —講師の立場からの報告—

三島 弘幸<sup>1\*</sup>, 濱田 美晴<sup>2</sup>, 高畑 貴志<sup>3</sup>, 立川 明<sup>4</sup>

要約：我々はTBLに関するプログラムを担当し、教育実践したので、その概要を報告する。チーム基盤型学習 (Team Based Learning, TBL) は、グループ学習を基盤とする授業方法であり、協同学習によって学生の能動的学習が活発化し、個人及びチーム全体の成長を促す。本プログラムの参加者は49名であった。午前の部において、講師が本プログラムの到達目標を示し、TBLの手法、TBLの流れやその効果を概説した。その後、小グループに分かれて、TBLを実際に参加者が体験し、その理解を深めた。午後の部では各自の授業科目に合わせた問題作成を行った。参加者は熱心に取り組んでいた。

キーワード：チーム基盤型学習 (TBL), アクティブ・ラーニング, 反転授業, SPOD

### 1 はじめに

高等教育機関の学生教育において、専門分野の知識だけでなく様々な出来事を的確に判断し対応できる力が求められている。そのため、対人関係スキル、コミュニケーションスキル、そして問題解決能力の育成が重視され、アクティブ・ラーニング、学生参加型授業、反転授業などの試みが高等教育機関で導入されている。大学へ進学する学生の増加や学外との協働など現代社会への適応が求められ、世界的に時代の変化に対応する大学の改革が進められ、新しい教授法の模索や教育実験が進められている。2030年には今までの大学の姿とは大きく異なった大学になると報告されている (Editorial, 2014a ; 2014b)。近年、チーム基盤型学習 (TBL) は米国を中心に、医学教育、歯科

医学教育、看護教育などで2003年より導入されつつある (葛城, 2013 ; 尾原, 2014 ; 三木, 2008)。TBL は知識を応用する能動的な学習に学生を引き込むことを重視し、グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える小人数チーム学習の教育法である (尾原, 2014 ; 立川, 2014)。

SPOD フォーラム2014において、その全体テーマは“気づき”と“振り返り”が大学を変える～成長を確かなものにするために～とされ、2014年8月27日-29日の3日間にわたり開催された。フォーラムは高知大学朝倉キャンパスを会場に多くのプログラムやシンポジウム (FD、SD、FD・SD 共通) が開講された。九州から北海道に至る多くの教職員が参加され、参加人数は8月22日現在で426名であった。その中で、下記の TBL に関

<sup>1</sup>高知学園短期大学 医療衛生学科歯科衛生専攻 \*Email: mishima@kochi-gc.ac.jp

<sup>2</sup>高知学園短期大学 幼児保育学科

<sup>3</sup>高知学園短期大学 生活科学学科

<sup>4</sup>高知大学 総合教育センター大学教育創造部門

するプログラムの担当を委嘱されて、教育実践したので、そのプログラムの概要を報告する。

2014年8月27日10時—15時開講、高知大学朝倉キャンパス共通教育3号館311番教室

「大学版反転授業：TBLの手法 ～問題を作って見よう～」

講師：立川明（高知大学）、高畑貴志（高知学園短期大学）、濱田美晴（高知学園短期大学）、三島弘幸（高知学園短期大学）

## 2 TBLについて

チーム基盤型学習 (Team Based Learning, TBL) は、グループ学習を基盤とする授業方法であり、1人の教員が担当する1クラスの人数が少人数、多人数 (100人以上) に関わらず学習を促進させるメリットがある (尾原, 2014; 濱田ら, 2011a, 2011b, 2013a, 2013b; 葛城, 2013; 三木, 2008; 立川, 2014)。TBLは協同学習によって学生の能動的学習が活発化し、個人及びチーム全体の成長を促す。学生間の互恵的な協力関係が育てられ、個人の責任性が生まれ、学生の相互作用が促進され、傾聴力や協調性が向上する。これはまた学生間の積極的な議論を導き、学習者を成長させる利点がある (尾原, 2014; 立川, 2014)。TBLを実践するにあたり、グループが適切に編成され、学習の質かつチームの質を高める責任を学生が持つことが重要となる。そのためには、学生には即時にかつ頻回にフィードバックを与えなければならないとされている。

## 3 プログラム概要「大学版反転授業：TBLの手法 ～問題を作って見よう」

参加希望者として、アクティブ・ラーニングを導入したい教員、TBLの問題を作成したい教員、反転授業を導入したい教員、学生の成績を上げたい教員という希望者で公募され、参加者が予定の定員より多くなり、教室を変更し、行われた。本プログラムの参加者は49名であった。初めに本プログラムの到達目標、①TBLの流れが説明できる、②TBLの効果として期待できることが説明

できる、③TBLのための良い問の3つの条件が説明できるという3つの目標を示した。その後なぜTBLの教育効果は高いのかといった講義を行い、下記の手順 (図1) に従い、参加者を1グループ6名に分け、プログラムが進められた。プログラムの実践様子を図2-7に示す。なお、写真掲載はSPODから許可を得ている。

1) TBL等のアクティブ・ラーニングを導入する授業で、初回に行うべき事 (ワークショップ)、グループ分け、アイスブレイキングやブレインストーミングのガイダンス。

TBLを実践するに当たり、初回授業時での注意点がある。初回授業のTBLで行われる流れの中では、グループ分け、アイスブレイキングやブレインストーミングの3点が大切である。①グループ分けで、学生がグループ分けに納得すること、②アイスブレイキングで人に対する緊張緩和ができること、大好きマップの活用 ([http://www.spod.ehime-u.ac.jp/contents/\\_contents2\\_33\\_1.pdf](http://www.spod.ehime-u.ac.jp/contents/_contents2_33_1.pdf)を参照)。③ブレインストーミングでは学習に対する緊張を高めるようにすることの3点である。グループ内での発言したがない対処法として、役割分担を割り当てることにより参加への障害が取り除かれる。

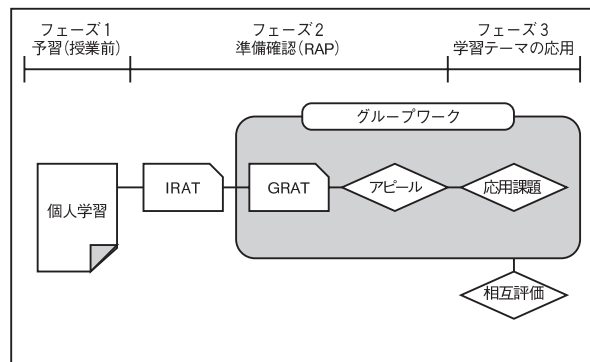


図1. TBLの実施手順

2) 個別準備確認試験 (ワークショップ) IRAT (Individual Readiness Assurance Test)

TBLのための良い問 (IRAT、GRAT) の3つの条件は、①予習範囲に必ず正解がある、②正解を選ぶ (ポジティブワンを挙げる)、③最も適するものを選ぶ (ベストワン) である。

### 3) グループ準備確認試験 (ワークショップ) GRAT (Group Readiness Assurance Test)

その場で解答がわかるようにする工夫 (スクラッチカードなどの使用など) が必要である。正しい知識の定着に役立ち、合意形成への関与の仕方に対するフィードバックになる。

### 4) アピール

正解に不満がある場合、グループの主張をアピール用紙に書いて提出する。アピールを作成することによりグループ討論が活発になる。

### 5) 応用問題

全チームに同じ課題を課す。全チームが同時に発表させる。

### 6) 貢献度評価

チームへの貢献度に応じて個々のメンバーの相互評価を行う。

### 7) 問題作成 (ワークショップ) やふりかえり

なお、このプログラムのテキストは下記のサイトに提示されている。手順の詳細が示されている。

[http://www.spod.ehime-u.ac.jp/fdspod2014/fdspod2014-fdsd\\_30.html](http://www.spod.ehime-u.ac.jp/fdspod2014/fdspod2014-fdsd_30.html)

[http://www.spod.ehime-u.ac.jp/contents/\\_contents2\\_33\\_1.pdf](http://www.spod.ehime-u.ac.jp/contents/_contents2_33_1.pdf)

参加者は教員や職員の方々の混合であるが、熱心に取り組んでいた。早速後期に授業に取り入れるという参加者もいて、精力的に取り組み、午後の問題作成にも熱がこもっていた。

## 4 高知学園短期大学での実践例の概略とまとめ

現在、筆者らが高知学園短期大学の授業の中で実践している TBL の一部を簡略に紹介する。

1) 濱田：情報科学 I・II (生活科学学科及び幼児保育学科) の授業において、年 4～5 回 TBL の授業を取り入れ、知識獲得、コミュニケーション能力の向上に努めている。

また、生活科学学科 2 年の教育の方法及び技術 (教職科目) では、TBL を実践する側の立場として問題作成を行うなど、協同学習の効果について学ぶことを目的とした授業を行っている。

2) 高畑：情報科学 I・II (生活科学学科) では、

情報セキュリティと情報倫理の部分に、また、情報科学 II (看護学科) では、授業中の確認のテストに、TBL の手法 (IRAT, GRAT) を取り入れた授業を行っている。これらの授業は、講義聴講だけでは印象に残りにくい内容の知識定着と、グループ活動によるコミュニケーション能力の育成を目指している。

また、教育の方法及び技術 (看護学科) の授業では、著作権の部分を TBL 形式で実施している。この授業では、知識定着と教育方法の一例を紹介するのが主な目的としている。

3) 三島：看護学科 1 年生の「人体の構造と機能 II」の演習において、後期の 1 回目に TBL を取り入れ、実践している。またそれ以降はアクティブ・ラーニングの手法を利用したグループワークを行っている。大学外の自己学習が一般的に少ないと言われる中で、TBL やアクティブ・ラーニングは学生の予習する時間を増やし、能動的学習を推進する効果があった。授業アンケート集計において、「授業の予習、復習はしましたか」の回答において、評価段階の 3-5 の学生が 2013 年度 91.4%、2014 年度 93% であった。授業外の自己学習を積極的に行っていたと考察される。

大学・短大・高専の教員や職員を対象としたフォーラム実施により、小規模短期大学でも、充実した FD を推進していくことが可能ではないかと思われた。今後とも四国内の愛媛大学、徳島大学、高知大学、香川大学が核となり、そこを基点に大学間 FD ネットワークを推進していただきたい。またフォーラムを通して、TBL 実践の交流を深めたい。

## 参考文献

Editorials, Universities challenged, *Nature*, **2014a**, 514, 273.

Editorials, The university experiment, *Nature*, **2014b**, 514, 287.

濱田美晴, 高畑貴志, 立川明, 三島弘幸, e-Learning システムを用いたチーム基盤型学習の導入, *高知学園短期大学紀要*, **2011a**, 41,

- 1-19.
- 濱田美晴, 高畑貴志, 三島弘幸, 立川明, 授業改善実質化の一手法 –TBL (チーム基盤型学習) の紹介–, 第59回中国・四国地区大学教育研究会報告書, **2011b**, 52-57.
- 濱田美晴, 高畑貴志, 三島弘幸, チーム基盤型学習におけるピア評価システムの構築, *高知学園短期大学紀要*, **2013a**, 42, 1-8.
- 濱田美晴, 高畑貴志, 三島弘幸, 立川明, チーム基盤型学習における協同学習の効果に関する調査–能動的学習の効果と考察時間による分析–, *高知大学教育研究論*, **2013b**, 16, 15-22.
- 葛城啓彰, 歯科基礎医学の講義に替わりうるチーム基盤学習 (TBL) の導入とその効果, *日本歯科医学教育学会雑誌*, **2013**, 1, 3-10.
- 三木洋一郎, チーム基盤型学習法 (TBL) を導入した授業, *高知大学教育研究論集*, **2008**, 5-13.
- 尾原喜美子, チーム基盤型学習法 (TBL) の効果とコツ, *週刊医学界新聞*, **2014**, 3020, 3.
- 立川明, <https://olss.cc.kochi-u.ac.jp/create/publication/tips/tips5> (参照2014-11-1).





図2. TBLの説明



図3. グループ分け

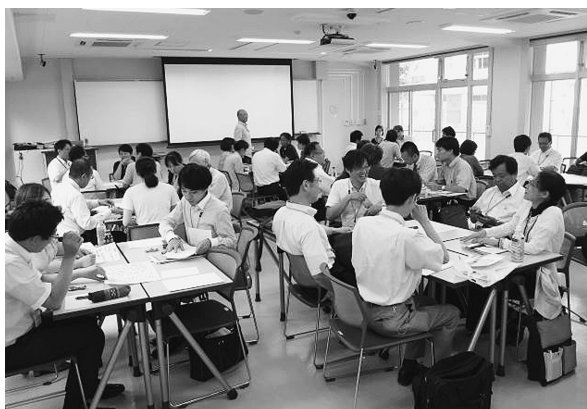


図4. グループ編成 (役割分担)



図5. アイスブレイク



図6. ディスカッション風景



図7. RATの問題作成

---

**Report**

---

**Report of SPOD (Shikoku Professional and Organizational Development  
Network in Higher Education) Forum 2014  
— Report from the position of lecturers —**

Hiroyuki MISHIMA<sup>\*1</sup>, Miharu HAMADA<sup>2</sup>, Takashi TAKABATAKE<sup>3</sup>,  
and Akira TATSUKAWA<sup>4</sup>

**Abstract:** We were responsible for inservice training of instructors in Team Based Learning (TBL) and led the participants in a demonstration TBL experience. This report is an outline of that training. TBL is an instructional method that utilizes cooperative learning through team work to activate individual student mastery of material. There were 49 participants in this program. In the morning session, the lecturer explained the goals of this method and then outlined the procedures and effects of the method. They were then divided into several small teams and experienced a TBL session to deepen their understanding of the method. In the afternoon session, they created tests for TBL sessions related to their particular subjects. They engaged in the training session with enthusiasm.

**Key words:** team based learning, active learning, flipped classroom, spod

---

<sup>1</sup> Kochi Gakuen College, Department of Medical Hygiene, Dental Hygiene Course, \*Email: mishima@kochi-gc.ac.jp

<sup>2</sup> Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care

<sup>3</sup> Kochi Gakuen College, Department of Human Life Sciences

<sup>4</sup> Kochi University, General Education Center, Education Creativity Section